
ミルトン・エリクソン講演録

臨床催眠のダイナミクス

1958年10月31日 カリフォルニア州
パサデナ St. Luke's病院

M. H. エリクソン著

中野善行監訳

日本エリクソンクラブ訳

金剛出版, 四六判 232頁, 3,850円, 2025年12月刊

(米国メリーランド, ウェイポイント・ウェルネス・センター)

大谷 彰

ミルトン・エリクソンに関する著作は日本でも多く刊行されているが、その大半は晩年になってからの共著であり、全盛期にあった彼の臨床および催眠についての詳細は残念ながら原著論文に頼るしか術がない。こうしたなか唯一の例外は彼が行った講演とデモンストレーションの記録^{注1)}である。本書はエリクソンが1958（昭和33）年10月、カリフォルニア州パサデナの聖ルカ病院にて2日間にわたり行った講義とデモンストレーションの全記録である。当時57歳、脂ののりきったエリクソンの催眠と暗示についての解説、および彼の患者や家族を具体例に引いての分かりやすい分析はメタファーや間接技法のみに親しんできた読者と臨床家に新たな視点を与えるであろう。

本書は「催眠現象」「催眠のダイナミクス」「催眠の技法」「催眠のデモンストレーション」の4部から構成される。第Ⅰ部は催眠の理解に不可欠な現象の解説である。その内容からこの講義が催眠に馴染みの浅い参加者を対象にしていることが窺える。続く第Ⅱ部は催眠誘導プロセスにおける特徴と重要点についての考察である。被験者の暗示に対する反応をいかに観察し、それをどのように理解、活用するかについて敷衍している。

第Ⅲ部の技法セクションでは自分の子どもや患者のケースを引用しながら数々のテクニックを紹介する。リフレーミングや利用 (utilization)、インフォーマルな誘導などは多くの読者の知るところであろうが、催眠誘導の核心となるさまざまなスキル（イントネーション、強調、非自発性、ペーシング、繰り返しなど）をどう活用するかについては目新しいであろう。そして最後の第Ⅳ部ではエリクソン自らが創始し、絶賛された腕浮揚のデモンストレーションおよび参加者へのフィードバックを元に、催眠誘導の実践におけるキーポイントと注意点を詳しく解題する。

エリクソンの催眠はややもすれば特別視され、「通常の」催眠とは異なるとみなされがちであるが、これは曲解である。催眠誘導の原則をしっかりと理解し、基本スキルを絶え間なく繰り返し練習することによって誰にでも実践可能となる。本書に記されたエリクソンの教えはこれを明示している。

催眠を真剣に学びたい人に必読の一冊である。

原書：Milton H. Erickson：Presentation to the Professional Staff St.Luke's Hospital, Pasadena California October 31, 1958

注1) 英語ではSeminars, Workshops, and Lectures of Milton H. Ericksonとして4巻が⁸Irvington Publishersから出版されている。